

Fredericia 市 介護付き高齢者住宅

フレデリシアはデンマークの首都コペンハーゲンから海峡を2つ越え、鉄道（国鉄DSB）で2時間くらいにある人口5万人程度の地方自治体（市）である。

古い建物がたくさん残っている旧市街地は城壁に囲まれている。かつてドイツと戦争があった。現在では城壁の跡地に歩道が整備され散歩を楽しむことができる。そうした歴史の名残なのだろうか、街の中の歩行者用の信号にも兵士が描かれている。



通勤には自転車を使う人も多い。さすが自転車の国である。もちろん歩道とは別に自転車専用道路がある。そういえば鉄道もそのまま自転車やペビーカー（対面式の大きな車輪のもの）で乗れるようになっていた。

始業時間が早い代わりに、終業時間も早い。週の労働時間は37時間で、残業はほとんどしないとのこと。通訳の木下さんによれば、公務員はそうでもないが、民間企業の労働者は金曜日午後1時か2時には終業となるそうだ。実際金曜日の午後2時過ぎにバスでの移動のとき、海峡にかかる橋で帰宅ラッシュの渋滞にであった。

何度も北欧を訪れて、「北欧 考える旅—福祉・教育・障害者・人生—」の著書でもある菌部英夫氏（全障研事務局長）によれば、「仕事を終えた後に余暇を楽しむので人生が二つある」とのこと。また、「夜に市議会が開催され、傍聴したことがある。地方議員もボランティアなので夜に開かれることが多い」とのことだ。

今回の旅の視察はここフレデリシアの介護付きの高齢者住宅から始まった。

城壁の一部を削って新しい道路が延びている。目的地はその道路に沿って旧市街地にあるホテルからは1キロくらいなので徒歩で移動する。東京を出てきたときには気温が30度もあったので、肌寒いくらいの朝の空気が気持ちいい。



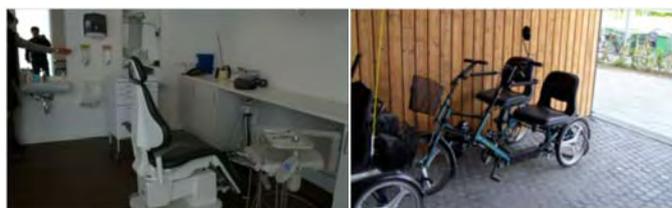
今では造船所などがある街になっていて、ホテルから建造している客船が見えた。

デンマークの朝は早い。夏時間ということもあって、暗いうちから通勤が始まる。8時（日本でいえば7時）にはオフィスでも工事現場でも仕事ははじまっていた。



シェークスピア劇場のグローブ座の建物からヒントを得たという高齢者住宅オセロは円形の建物である。建って1年という新しいものである。近くを走る鉄道（近くにフレデリシアの駅がある）と道路から音を遮断するためにこの形が採用されたそうである。鉄道の線路と敷地のあいだには大きな樹木も残されているので、決して騒音がひどい環境ではないと感じたのは私が日本人だからだろうか。

オセロは市営の施設であり、そこで働く職員は市の職員である。市営の介護付きの住宅はいくつかあるが、介護を必要とする高齢者はリス



トに登録され、本人の状態だけでなく介護しやすいかといった住環境も考慮して、適当な住宅が保障されるのだそうだ。

中庭はホールのようになっていて、実際に演奏会も開催されるそうだ。

1階（現地では0階）には高齢者のデイケアセンター（利用者34名）が入っている。歯科治療室や休憩室、デイケアの利用者が利用するカフェテリア（居住者の食事については、ここに厨房の施設もあるが、給食センターでつくられたものが運ばれてくる。温かいものは各階にある厨房で利用者と一緒につくる）、リハビリ室、ゲストルームなども備えている（歯科医師やPTなどの職員は派遣されてきているとのことだった）。

曜日によってはボランティアの人が入るので、散歩や外出する活動はその時に行うのだそうだ。

自転車の国なので、介護を必要とする人にも自転車に乗れるように二人乗りの自転車がおいてあった。

デイケアのサービスを利用する人たちは大型のタクシーなどで通ってくる。リフトを備えた大型タクシーが一般的に利用されている（スウェーデンでもフィンランドでも学校の通学などで一般的に使われていた。）。この施設では1台バスを

所有していて、これは主に外出の時に利用するそうである。もう一台購入するための募金箱がおいてあった。

2階（現地では1階）から6階（現地では5階）までが住居部分である。採光を考え、外に面した部分に住居、中庭に面した部分にスタッフの部屋を配置されていた。



全部で 119 戸の住宅があり、狭い間取り（単身者用のタイプ）と広い間取り（夫婦で入居するタイプ）があるが、いずれの寝室にはベッド 2 つを入れられる広さがある。各住宅はキッチンが付いた居間と、寝室、トイレ・浴室（入浴する文化ではないので浴槽はないが、洗濯機と乾燥機が付いている）がある。住居の広さについては国の最低基準があるようで、十分な広さが確保されている。ケアの必要な人のための住宅ではこの広さが居住者だけでなく介護者にとっても必要なことである。

狭いタイプが 108 戸あり、個人のスペース部分だけで 59 平方メートル（共有部分も含めると 1 人あたり 83 平方メートル）、家賃は 5,698 デンマーククローネ（10 万円弱）＋光熱水費。施設長から「日本と比べて高いか？」と聞かれたが、日本だと 2 倍くらいするのではないだろうか。

広いタイプの住宅は個人のスペース部分だけで 75 平方メートル、有部分も含めると 1 人あたり 96 平方メートルとのこと。



先日、ラジオを聞いていると住宅問題の研究者が「日本には賃貸住宅の政策がなかった」と話していた。肩代わりしてきたのが企業で、社宅とい

う形での住宅保障をしてきたのだという。

家賃補助にしても企業による「住居手当」という形では、自営業の人などは対象外で、国民全体を対象としたものはない。

デンマークでは住宅保障の考え方は日本とは大きく違っている。住宅公団が住宅を建設し、低額の家賃の住宅を供給することで、国民に住居の保障をしているということだ。

また公団は建設資金を出して、家賃を徴収するのだが、住宅建設の設計にはその住民の意見が取り入れられる。オセロではベッドルームの天井には介護用リフトのためのレールも設置されていた。電磁調理器、冷蔵庫、洗濯機などは備え付けが一般的なのだそうである。壊れたら住宅公社の責任で修理がおこなわれる。

オセロが従来の住宅と違うのは共有部分を広くとっていることである。12 戸ごとに共有スペースが 1 階あたり 2 つずつある。共有スペースには共有の居間があり、調理設備も整っている。ここで職員とできる居住者が一緒に食事の準備をする。見学時には職員がパンを焼いていた。



共同の居間のあるところの中庭側には共有のテラスがある（全部で 22 か所）。

各部屋の扉は引き戸ではなく、外開きのドアであった。したがって、開閉が困難な人はドアを開けっ放しにしていた。「ドア」の文化の国だからなのであろう。

さらに、人的サポートが保障されている国ということもあるのだろう。支援する人が付けば身体

の不自由な人が自分でドアを開ける必要はない。そういえば空港の障害者用のトイレも自動ドアではなかったし、駅のホームに点字ブロックもなかった。視覚障害の人にはサポートをつけているということなのだろう。

各部屋の表示はその人らしいものになっている。1階には日本でも集合住宅にみられるポストが並んでいた。「老人ホーム」ではなく、「ケア付きの住宅」というのにふさわしい施設である。



こうした生活を行うための所得保障については翌日、今年6月までフレデリシアで高齢者介護部長を務めていたゲオ・トマセンの講義の中で話があった。それによれば、次のような所得保障がある。

65歳以上の人全員に国民年金が出る。40年住



んでいるという条件はあるが、これは仕事をしていようが、していまいが変わらない。

その上で年金生活者には住居費の補助がある。医療費や補聴器、メガネにも補助がある。市バスなども安くなるし、博物館などの入館料も無料になる。

年金の額は政府が生活できる額を計算して定めている。さらに年金生活者には住居費、光熱費、食費など必要な物を除いて、収入が1500クローネを下回る場合には市が所得保障をしてくれる(1500クローネ≒25500円)。

国民年金だけの人はいない。多くの人は他に収入がある。勤めていた人の場合には給料から引かれた積み立てからの収入がある。個人で積み立てをしている人も多い(税率が安い)。他に収入がある場合には国民年金は減額される。

デンマークでは消費税だけでなく、所得税も高いとのこと。ただし所得税にはすべての人に個人控除があるとのことなので、所得の少ない人からも一律に高い税金を取るようなことはないようだ。いずれにしても納める税金に見合うだけの社会保障があるのだ。